

K子を絵本の好きな子にする試み

—— 文字に焦点をあてて指導 ——

中西史子

1. はじめに

K子は、入学以来、集中力、持続力に欠け、学習や遊びが中途半端になってしまふので、能力が定着しにくいという現状にある。そこで、K子の好きな絵本を通して、集中力、持続力を育てる課題に迫るとともに、絵本に親しほせることにより、そこに含まれる能力(絵本を見ること、文字を読むこと)を伸ばしてやりたいと考え、このテーマを設定した。

K子には、少し読める文字があり、文字に関心を持っている段階にあることからここでは、絵本(ストーリーのあるもので、やさしい文章のついているもの)を手段とし、文字を読むことを目標とした。(これは、次の単語の理解、文の理解につながる)そして、二次的効果として、①想像、表象の深化(推理、思考への基礎)②情緒の発達(楽しい感じ、絵本の内容に含まれる喜怒哀楽への共感)がねらえることを意図し、指導方法を考えてみた。K子が、文字を通して示した行動変化を事例を挙げながら述べてみたい。

2. 対象児の実態

児童名、K.M(女) S50.10.19生れ 現在小学部4年生

50音の文字を全部は、覚えていないK子であるが、小学部の子どもの名前を15人とも読み当てることができる。1字1字が完全に読めるのではなく、その中のいくつかの文字から連想して、言い当てることができるようだ。では、実際に、どの程度読めるのか調べてみた。(表.1)

あ	ら	ゆ	ま	は	あ	た	き	の	あ
い	り	い	み	ひ	ぶ	ら	し	き	い
う	る	ゆ	ま	ふ	ぬ	つ	す	く	う
え	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	あ	よ	ま	ほ	の	と	ま	さ	る

(表.1)

気分のみらによって、読める文字が多少異なるが、平均して、2文字を読んだ。K子の場合、①わかる文字(「あ」はどれですか?という問いを聞いて「あ」を取ることができる)②読者できる文字③物との関連でわかる文字(「み」はどれですか?の問いでは取れないが「みかんのみ」はどれですか?の問いであれば「み」を取ることができる)の3タイプがあることがわかった。

■ わかる文字

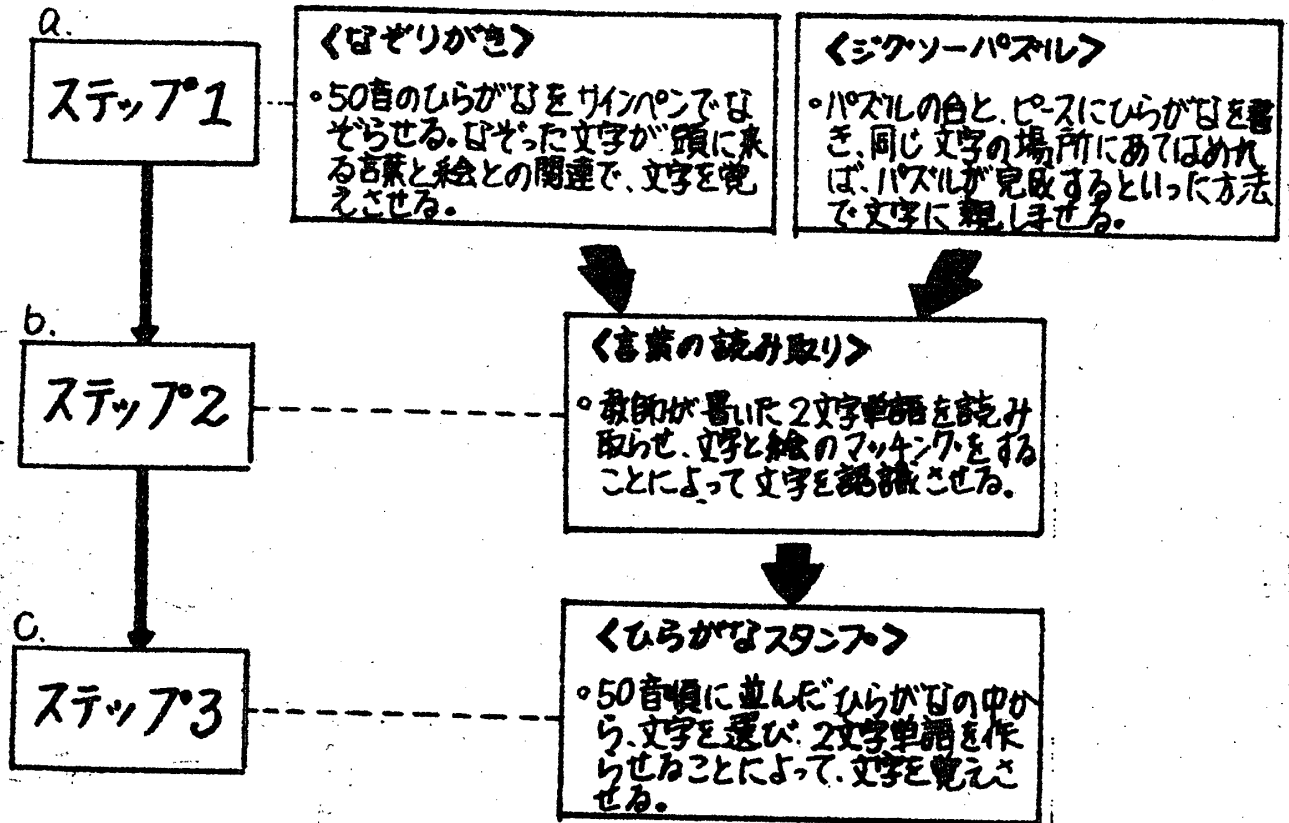
○ 読者できる文字

△ 物との関連でわかる文字

3. 指導方法

Ｋ子の文字に関する実態や生活態度から、3つの内容を重点化して、指導した。即ち、能力、意欲、友人関係の改善である。

(1) 文字をはっきりわからせ、読めるようにする。(文字を覚えて、読む力を養っておく)



(2) 絵本を楽しむ (意欲を養う)

(ア) 歌、踊り	(イ) 読み聞かせ	(ウ) 絵読み	(エ) 文字の拾い読み
<ul style="list-style-type: none"> 絵本の絵から、学習した歌を歌ったり、踊ったりして雰囲気作りをする。共に本に親しませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が絵本を感情こめて、読み聞かせることによって、絵本の世界にひたらせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の絵を見て、思いつこま、自由に話をさせ、想像力を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の文字を1文字、1文字でいかに読ませ、文と絵が一致していることをわからせ楽しませる。

(ア)→(エ)を一連の学習として、個別学習の時に繰り返す。

(3) カルタ遊びをする (友達と関わって遊べる力を養っておく)

Ｋ子は、周りの刺激に影響されやすいにもかかわらず、友達らとの交流がへたである。そこで文字を読み当てるといった要素を持つ、カルタを通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わわせると共に、遊びに対する意欲を高めた。

4. 実践例

(1). 文字指導の経過

	10月	11月	12月
ぼぞり書き	<ul style="list-style-type: none"> 注意散漫で集中できず。読えず。言葉かけをしていないと他のものに気が移ってしまい、中途半端になることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 初めは、そばについてはせられたが後半は自分で一枚ぼぞることができた。「あめのお」「いぬのい」と一人二ことまいいながらぼぞっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 15分程度、集中してぼぞれるようになり、途中、「お父さんが来んさつよ」と呼びかけをし、ふり向きながらぼぞる姿がみられた。
ジグソーパズル	<ul style="list-style-type: none"> ピースの裏に書いてある文字にはあまり関心がなく、ピースの形ではめることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ピースの裏の文字と同じ文字の場所へはめるは合うことに気づき、文字を見てはめることができた。 	
言葉の読み取り	<ul style="list-style-type: none"> 文字だけでは、まだ難しく、文字と絵のマッチングで読んでいった。か時々でたりのことし言った。 	<ul style="list-style-type: none"> 文字だけでも読めるようになるが、同じ「い」でも「いぬ」は読めるが「いし」になると読めないといった困難性が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 2,3文字単語が多く読めるようになった。始め「かやち」などはいくつかのパターンでも読めるようになった。また、自分で音を書きかきようという意欲がみられた。
ひらがなマス			<ul style="list-style-type: none"> 50音順に並んだ文字の中から目的の字をさがし出すことで精一杯。まだ自由に言葉を作る楽しさばかりではない。

(2). 絵本に親んだ様子

(ア) 絵本のストーリーには関係ないが、絵本に登場する動物、主人公等の歌、「野ねずみ」「やきいもクッキー」「あけんのぼうのサンタクロース」等をリズムよく、体を左右に揺らしながら楽しく歌うことができ、絵本の世界に容易に入ることができた。結果としてクリスマス発表会にこの手法を多用し成果をみた。

(イ) 自分の読んだ本を本箱から取り出し、教師に「読んで」といって渡すことができた。教師が読みながら、「ページ」「ページめくってね」、新しい絵が現れると、K子は手を叩いて喜び、熱心に話を聞くようになった。また、途中、教師の簡単な質問（このネコは何色？）といった程度の）や言葉かけに正確に且つ素直に答えることができた。

(ウ) 最初は、絵本を見ても「これは クさきさん」程度の話しができたばかりだったが、12月に入ると、乗物や動物の絵を見て、長いお話ができるようになった。内容は、全く意味の通じないものであったが、素直なK子が自発的に真似る表情

—はじめてのトラックがくると、おのあさんが「あけてください」といいました。オートバイにいましたら、かめさんは、トケイに「また きんさいよ」といいました。……

(12月28日) K子の話より)

で絵を指さしながら、何分もの間、熱心に話す姿に、K子自りのイメージが頭の中で深まりつつ錯綜しているようであった。

(2) 初めは、意図的に文字を指さし「これは、何て読むの?」と一字一字読ませていったが、K子の方から、これは、「みかんのみ」と指さしたり、「まはここにもあるぞ」と絵本の中の他の場所を指して教えてくれるようになった。また、「いぬ」という2文字の言葉から、動物の犬を連想し、犬のおまわりさんの歌を歌うこともあった。

(3) 反だちとの関わり

昼の休憩時は、ほとんどK子が自主的に、カルタ遊びに取り組んだ。10月頃は教師と1対1で遊んだが、11月になると、M男が遊びの中に入って、一緒にするようになった。普段の遊びでは、反だちを絶対に入れたいK子であるが、1つの文字を相手よりも速く探し出すという喜びを伴った競争が楽しいらしく、1対1をする時よりも真剣にカルタを取る姿がみられた。また競争相を得たことにより、文字を早く覚え、集中力もかなり伸びたと見える。そして、カルタ遊び以外での生活場面でもM男と関わりが多くもて始め、会話をしきものが芽生え始めている。

5. 考察と今後の課題

個別指導を始めて、2ヶ月余りであるが、K子は、意外に早く文字を覚えた。(表2)これは、ジグソーパズル指導(3)でのカルタのよみかたゲーム遊びを通して覚える課題を取り入れた

ことが効果的であった。また、なかり書きや言葉の読み取りでは、文字を覚えるに従って、集中して取り組む時間が長くなり、途中で飛出すことが少なくなった。このことは、絵本を見る場合も同様であり、K子の方から積極的に好き本を選んで、敬的に要求し、話を

わ。	ら。	ま。	は。	は。	た。	さ。	か。	あ。
い。	よ。	い。	み。	む。	り。	と。	き。	い。
う。	る。	あ。	も。	い。	ぬ。	つ。	す。	く。
え。	れ。	え。	ぬ。	へ。	た。	な。	け。	た。
を。	あ。	よ。	も。	は。	の。	と。	も。	こ。

(表 2)

熱心に聞く姿や、自由に絵読みができるようになるほど、活ら着いた時間を通じることが多くなると見える。それと同時に、自分の気持ちや思ったこと(イメージ)を嬉しやかに口に出して伝える回数が増え、話し声、読んだりすること、今までよりも、もと絵本の世界が広がっていくのを感じたようである。この成果を生かすため、周りに絵本のある環境を整え、片言でも本を読んで、絵本を更に楽しむようにさせたい。また、カルタ遊びでは、反だちと関わりをもて始めた。しかし、今の段階では、大人の介在した10分程度の持続にすぎず、今後、もと言葉によって円滑に交流できるよう力を注いでいきたい。